



### 哀悼・吉田美穂子さん

2011年1月17日12時5分、NPO法人東京自由大学副運営委員長・理事の吉田美穂さんが急逝した。享年60歳。4年ほど前に乳癌が発見されたが、現代医療にかかることなく、強い精神力で持ちこたえてきたが、終に不届の人となった。

亡くなる直前まで自治会の経理の仕事をして、それをきちんと片付けてから倒れて意識不明となり、数時間後に息を引き取った。その最期を、大重潤一郎監督は通夜の席で、「まるで、古武士のような立派な最期であった」と称えた。

1月20日に築地本願寺でお通夜、翌21日に同寺で告別式があった。磨赤児氏やあがた森魚氏からの生花、佐治晴夫氏や柿坂神酒之祐氏からの弔電が有難く、心に沁みた。2月23日には、「吉田美穂子さんを偲ぶ会」を東京自由大学で行った。66名もの多くの参加者が集まってくれ、龍村仁氏、原田憲一氏、島蘭進氏らからスピーチをいただいた。また、曾我部晃氏、佐々木雅之氏、三上敏視氏、菜花英子氏、松倉福子氏らの音楽や文章の朗読をいただいた。吉田さんのご主人の朋仙さん、長男の篤仙(あつり)さん、長女の侑加(ゆか)さんが出席してくださり、深く心に残る

### 2010年度ゼミナール報告

#### 調査研究事業

#### 仏道探求ゼミ～玉城仏教学を根底に～「維摩經」講読

鈴木 龍太 (会員)

当ゼミは毎月第2火曜日夜に開催されており、私は2007年より参加しています。その間、「大乘起信論」『臨済録』と講読は進みました。

大乘起信論は、日本・中国の仏教者たちに圧倒的な影響を与えた、仏教史における最高のテキストの一つであり、また、如来蔵思想の観点から仏教全体を把握した綱要書として、仏教入門の書としても、史上名高いものである。この書を深く理解しつつ通読し終えることは、そのまま仏教初歩的入門課程修了であると前ファシリテーターの先生はおっしゃっていましたが、私は深い理解のないまま時は過ぎてしまい、ファシリテーターのご出家に伴い、後任ファシリテーターの野村先生の選ばれたテキストは、維摩經。



講師：野村 懐忍氏 (高野山東京別院執事)

維摩經といえは、在家者の立場から大乘仏教の空の思想を高揚し、日本でも仏教伝来間もない頃から広く親しまれた初期大乘仏典の傑作とは聞いてはいましたが、未だ読んだこともなく継続参加決定いたしました。

後任ファシリテーターの野村先生は社会人生活を経て高野山でご出家、山に籠ること10数年、仏教全般に明るく、不動護摩を修めること千座を超え、芥川の往生絵巻、五位の入道のような仏恋慕型僧侶。野村先生のお師匠様曰くゼミの講師には打ってつけの方であります。野村先生の底知れない知識の宝庫より毎回、様々なお話を頂いており、先生とのざっばらんな意見交換も当ゼミの魅力の一つです。

ゼミの進行は毎回国訳大蔵經の該当部分を音読、担当者が和訳したもの(といっても沢山の訳本が出版されております)を読み進め、その部分について自由活発な議論をしております。羅什訳維摩經は名文が沢山あり、読み下し音読時に惚れ惚れすることしきりです。ゼミ生間の熱い議論はブッダ、アーナンダ、空海、道元、親鸞、盛蓮、弁栄上人、宇宙、虚空まで話が突き抜けてしてしまうこともしばしば、大変エキサイティングなゼミに参加でき、有難く思っております。

書店に行けば数多の仏典が並び、命がけて経典を求めていた時代とは次元の異なる現代ですが、あまり安易に入手できるため、一人ではじっくり通読することもなく積読状態が続いておりましたが、ここ、神田の仏道ゼミは贅沢な空間です。ご興味のある方、是非御集下さい。

#### 自主ゼミ

#### シュタイナーゼミ

鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)

自主ゼミの最古参、シュタイナーゼミ。今年は西川隆範先生に御指導を受けつつ、シュタイナー派の仏教に関わる文献を購読した。参加者それぞれの経験と学識に基づく自由な討論も行われ、広範囲に及ぶ話題でシュタイナーを多角的にとらえる試みとなった。

#### 事務局だより

井上 喜行 (理事・事務局長)

今年度も終わりましたが、どの講座も「いい講座だった!」と参加者から声がありました。もっとたくさんの方に参加してほしいと、宣伝不足を反省しておりますが、この小さな教室で素晴らしい先生方のお話を間近にお聞きできることは、東京自由大学ならではの日本一贅沢な講座と言われる所以です。2011年度もどうぞ皆さま、講座にご参加ください。

●http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/ ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.16

2011年(平成23年)3月25日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870  
デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

#### NPO法人東京自由大学理事長 鎌田 東二

徳ぶ会となった。

創立以来12年間、吉田美穂子さんは東京自由大学のために多大の貢献をしてくれた。理事として、副運営委員長として、また「宇宙を知るコース」や「アートシーン21」の講座、「ほどきとむすびの宇宙」などいくつもの大きなシンポジウム、「三省祭り」、岩手や隠岐や白山や北海道などの夏合宿の担当者として、自由大学の活動を力強く支えてくれた。

「東京自由大学は現代の羅須地人協会である」というのは吉田美穂子さんの口癖だった。その言葉が嬉しかった。そして、その遺志を持ち続けて、激動の時代の渦中、しっかりと東京自由大学の使命を果たしていきたい。吉田美穂子さん、これからおわたしたちを見守っててください。かぐや姫の君に捧ぐ。

降る星の 光かそけく 消ゆるらむ この世に伝ふい のちのこして  
神ながら 道のまにまに 咲く花と 君がみたまの 跡は残りて  
人間はば おのがいのちに 聴きてみむ 行く先はるか 常世なりせば  
東二様

#### 自主ゼミ

#### 荘子読書会

白木 光貴 (担当・会員)

二千数百年前に書かれ、「天下の奇文」と言われている「荘子」を輪読する会で、33篇に分かれ、六万余字から成る漢文を、「読み下し文」と「意訳」をベースに読み進めていますが、個人一人でページ順に読むだけでは理解が難しいところもあり、歴史・文化などの背景を踏まえながら、木村先生が適宜なテーマで括ってわかりやすく解説してくださいます。更に海野学長がこれらに独自解釈とコメントを寄せられ、「本会」は悠々と進みつ、戻る為、この河が、いつの日にか海に辿り着くか、乾しあがるか、大河になるのかは判りませんが、船上の我々はいろんな風景を楽しむことができます。

22年度で印象に残るテーマは「大宗師篇」の読解時において、「道を得る為の手法」として坐忘・心齋・見独などを議論したあたりでしょうか……。



講師：木村 真呂先生

#### 自主ゼミ

#### 民俗舞踊の身体研究会

鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)

2010年度が一番の収穫は、須藤武子先生が長年関わっておられる、早池峰大償神楽の春の舞を見学できたことであった。毎年、4月末に行われる、大償神楽の春の舞は、神楽連中の新人の登壇門でもある。一般にはあまり公開されない催しだが、須藤先生の導きによって、早春の早池峰の麓を訪れ、神楽を見学し、神楽保存会の方々とも交流ができたことはありがたく、一気に大償神楽の懐へと導入されたようであった。

綾子舞は、長年取り組んだ甲斐あって、動きや歌がおおよそ身について、これからの踊りの中に潜む身体の智慧を知覚する段階へと進歩してきた。



講師：須藤 武子先生

また、この研究会発足時から一緒に励み、早池峰の春の舞見学ツアーでは尽力くださった、吉田美穂子さんが急逝されたことは皆の驚きであり、悲しみであった。須藤先生と増田良己さんの導きで、鹿島踊りのなかの念仏踊りを唄い踊り、吉田さんの供養とした。須藤先生の研究会でなければできない、自然な流れから供養の祈りへと移行する、心のこもった追悼の舞踊りであった。合掌。

#### ■編集後記

岡野 恵美子 (理事・運営委員長)

4月23日(土)、なかのゼロホールで「シャーマニズムの未来～見えないモノの声を聴くワザ」(舞踏+シンポジウム)、視聴覚室で「久高オデッセイ第2部一生章」上映会を開催します。自信を持ってお勧めする東京自由大学ならではの内容の企画ですので、お見逃しなくぜひお越しください。3月は京都で春合宿をしましたが、志村ふくみさん、西平直氏、大重潤一郎監督等の話し、新作能舞、比叡山登拝、お茶会など連日多彩なスケジュールが展開されました。新年度2011年度カリキュラムも充実しておりますので、同封フライヤーをご熟読の程お願いします。

#### 2010年度〈三省祭り〉

### 「アニミズムと文学」

#### 2011年10月30日(土) 報告

岡野 恵美子 (理事・運営委員長)

出演者：宮内勝典氏 (作家)・田口ランディ氏 (作家)・鎌田東二氏 (京都大学こころの未来研究センター教授)

2010年10月30日(土)、第2回「三省祭り 2010」第一部シンポジウム「アニミズムと文学」が、宮内勝典氏(作家)、田口ランディ氏(作家)、鎌田東二氏(京都大学こころの未来研究センター教授)の3氏をパネリストに、京都大学 東京オフィスで開催された。特別ゲストボブ・サム氏の祈りと佐々木雅之氏の音霊が奉奏された後、パネリスト3氏各自が選んだ山尾三省の詩が朗読された。宮内氏は「火を焚きなさい」、田口氏は「足の裏踏み」、鎌田氏は「静かさについて」。

宮内氏は18歳の時、1960年代に山尾さんに出会った頃、山尾さんと共にアナーキズムを通じて生態学的な新しい思想を手探りしていた。山尾さんは六十二歳で世界するまでひとつの夢や志をつらぬいていた、最後の著作は『アニミズムという希望』であり、まさにアニミズムに希望を託している。宮内氏自身、一神教やイデオロギーへ体系化されがちな知性を逆に使って、山川草木に神が宿る多元的世界に踏みとどまる、ぎりぎりの理性で、あえてアニミズムに踏みとどまる。と決意の言葉を述べられた。

田口氏は、山尾さんに会ったのは亡くなる3か月前の2001年5月のたった一度きりだが、山尾さんが「自分は、魂というのは水のようなものじゃないかと思っている」と言われたことが大変深く自分の中に入って、どんなことを考える時も、いつもヒントになっていると述懐された。亡くなった山尾さんを相手に、「神様って何ですか、カミって何ですか」といつも繰り返して繰り返して聞いていたが、自分自身の中の問いとして、山尾さんから自分に残された宿題だと思っている。晩年の山尾さんは、男性的な信念を

#### 現代霊性学講座第一弾～連続シンポジウム～

### 仏教は世界を救うか?

3月5日、現代霊性学講座第一弾-連続シンポジウム-仏教は世界を救うか? 第二回シンポジウム「仏法とは真理か」が、パネリストに藤田一照氏、西川隆範氏、井上ウイマラ氏、司会は鎌田東二氏で、会場いっぱい参加者を集めて行われた。今回は、いよいよ仏教の中核ともなる「法(ダルマ)」を取り上げて、熱く深い討議が行われた。

シンポジウム前半のトップバッターの井上氏は、「智慧の響き」という歌から。これは般若心経の内容を井上氏が歌詞にしたもの。四聖諦、縁起など仏教の根本的な教え(法)について、心理学や現代の思考で分析された。仏教の基本的な認識である「苦」については、苦を知り尽くし、苦を理解することで人生の意味を発見し、それを受容する意識へと至ることなど、また、日本仏教では、悟りの内容についての言及が少なすぎ、解脱には条件があり、段階があること、真理の重層性について語った。

西川氏はこのシンポジウムのタイトルである「仏教は世界を救うか?」という命題には、救うと答えられるが、仏法は真理か?という問いには、簡単に答えられないという。仏教は他の宗教に比して、真理性を確認しやすい宗教哲学であるが、四苦八苦のなかの生れることは苦と認識できるか? 無我、自我とはなにかと問うと簡単ではないこと。大乘の誕生、空の認識、浄土教における極楽浄土は空か、日本の末法思想とインドのカリユガの時代の関係性、現代は不滅の自分というものを求めているのではないかと語った。

藤田氏は、そもそも「真理か」という問いそのものについて、宗教の真理とは誰にとつての真理か、宗教の真理とは主体的真理であって、証明の必要のないもの、自分に返ってくる問いであることを指摘。大乘では、釈迦は一切衆生を解脱の岸に運ぶために現れてくれた応化身。自分たちもそうなる、という意志をもつ菩薩という存在が出現。菩提心をおこしたとたんに絶対的な意味変化がおこる、苦勞の意味が全く変化する。それは主体的な真理であり、仏法の真理は自分が人生を持って証明するしかないもの。そして現代において今までの仏教の教相判釈も必要。日本の仏教はネガティブな観念である「掃蕩門」が多用されがちがあり、アメリカではポジティブな「建立門」的な感覚が多いことを指摘。

後半で、井上氏は聖なるものについて、法や教えを自分の実に関わるものとしてとらえることであること、涅槃の体験とは、本当に分ったら変化することであり、苦しみや消滅となること、苦は死だけでなく誕生にもあり、その苦しみや痛みが生きる力のスイッチとなりえることなどを、発達心理学などと関連させて語った。

西川氏は、現代の若者が自我のあり方が希薄になったことについて、東洋人と西洋人の違い、もの考える人間が苦や悪の気づき、悩むことにより涅槃への道が生まれること。悟りの段階については、カタルシス・浄化、エンライトメント・気づきの瞬間は宗教とともに学問や芸術でも起こりえること。神秘的合一は、自我のあり方の変化であり、次元の違う自分の発見であることなどを語った。

藤田氏は、真理とは、絶対的な面として、本来あるべき姿であり、宇宙を統べるダルマであり、ベースにあるもの。人間の側からみると、人間は法にのっついていなくて、非本来的に生きているという問題意識をもち、自己反省し、本来に戻ることができた



持ちつつ、大自然の中で女性性を育み、二つのバランスをもとれるようになっていた、それが詩作にも表れていて、母性を感じる詩を書いていると指摘された。

山尾三省さんの中に生態学的感性を強烈に感じる、生態学という学問とか言葉ではなく、生き方、イマジネーション、感覚、センスとして生態学がその人自身になっている、まさにアニミズムに希望を託している。宮内氏自身、一神教やイデオロギーへ体系化されがちな知性を逆に使って、山川草木に神が宿る多元的世界に踏みとどまる、ぎりぎりの理性で、あえてアニミズムに踏みとどまる。と決意の言葉を述べられた。

田口氏は、山尾さんに会ったのは亡くなる3か月前の2001年5月のたった一度きりだが、山尾さんが「自分は、魂というのは水のようなものじゃないかと思っている」と言われたことが大変深く自分の中に入って、どんなことを考える時も、いつもヒントになっていると述懐された。亡くなった山尾さんを相手に、「神様って何ですか、カミって何ですか」といつも繰り返して繰り返して聞いていたが、自分自身の中の問いとして、山尾さんから自分に残された宿題だと思っている。晩年の山尾さんは、男性的な信念を

第三回「三省祭り」開催予定日は2011年10月29日(土)(※会場未定) です。

### 第二回「仏法は真実か」

#### 2011年3月5日(土) 報告

鳥飼 美和子 (理事・副運営委員長)



左から鎌田 東二氏(司会)・藤田 一照氏、西川 隆範氏、井上 ウイマラ氏(パネリスト)

のがブッダであり始祖であり、彼等は目に見えない法の輪郭を言語表現で描きだしてくれた。そして、本来あるべき姿に戻ると言うことは、本当は何も変化しておらず、自己に目覚めることである。

司会の鎌田氏は仏教の哲理の面と臨床(方便)の面とがあること、仏教は密儀的伝統が作りだすインフレーションを断ち切る解毒剤であることを指摘した。また歴史的流れのなかで、仏教はどのように働いているか、初期における単独者の悟りから国家仏教を経て、再び単独者として、自己と他者との問題にコミットし、現代の意識魂の時代に、文明システムの中でどのような機能しようかという問題を提起した。

井上氏はエンゲージドブuddiズムの例を挙げつつ、気づきの自己組織化を社会変化につなげて行くこと、コミュニティ化してゆくことが大切であると指摘する。

藤田氏は若者の自我の希薄化と言うが、我執はあり、見えにくくなっているのではないかと指摘。西川氏と井上氏はその問題では、身体と精神の結びつき、産業革命、情報革命の問題でとらえた。井上氏は幼少期の受肉の失敗が関与しているのではないかと、また、仏教の六道輪廻はコスモロジーとしてだけでなく、今生きているこの世界が六道輪廻であることを精神病理の問題から指摘。また、弱肉強食、適者生存の社会から、弱さや悲しさを含みこんで生きる新しい社会へと変化しているのではないかと、輪廻も進んでいるのではないかと提起があった。

会場からの質問用紙への答えでは、因果について、仏教が世界の基軸となる思想となりうるか、お寺や葬式のあり方についてなど、これも興味深い話が展開された。

あつという間の4時間で、パネリストの個性が際立って、仏教へのアプローチの多様性が鮮やかに見えてきた。また、それを越えた共通の問題意識も見えてきて、次回の社会と仏教の問題がさらに期待される。

狭い会場で参加者の方々にご不自由をおかけしましたが、皆さん熱心に耳を傾け、ご質問なども寄せていただいたことを心より感謝いたします。

21世紀世界地図総括～「未知のもの・こと」へのまなざし～

今年度の5人の先生に共通している点は、そのまなざしの向こうに、しっかりとしたヴィジョンが見えていることである。先生方のまなざしに少しでも近づける体験を通して、私たちも21世紀の姿が、少しだけおぼろげに見えてきたように感じます。

4/17(土) 「現代音楽はどこへ行くか？」

**新実 徳英先生** (作曲家・桐朋学園大学院大学教授)  
音楽も人間もその本質には「らせん状」・「波動」的なものがある。そしてその二つは本来、「宇宙の基本原理」でもある。したがって音楽も人間もそれから逃げることはできない。現代音楽は、エンターテインメント性ではなく、音楽の本質を追究しようとしている。現代音楽を初めて聞く人は、最初は不快感を感じるかもしれない。でも、それに聞き慣れようとすると、宇宙の真理にまた一歩近づくことになる。

6/19(土) 「地球の目線—環境文明の日本ビジョン」

**竹村 真一先生** (文化人類学者・京都造形芸術大学教授)  
月や火星に多くの人類が移住することは、おそらく不可能だ。宇宙空間に少し出て行った人類は、ようやく少し地球のことが見えるようになった。日本は現在、石油を買うために25兆円を毎年支払っている。10年後はさらなるコスト高(枯渇がはっきりしてくることによる)により、50兆円になるかもしれない。そうなったら日本だけでなく、世界全体が社会を維持できなくなる。地球にしか生存できないことがはっきりした現在、私たちが今、決意しなければならないのは、「石油エネルギー文明」から脱却し、「自然エネルギー文明」(新エネルギー) への大きな方向転換である。



2010年度 身体の実践哲学としての気功

9/25(土) 「身体の実践と霊性修行」

講師・外山 美恵子先生

「身体の実践・ボディワーク」の講座・ミニワークは、今年は気功を取り上げました。題して「いのちの実践哲学としての気功-身体の実践と霊性修行」。その第一回目9月25日は、NPO法人心とからだの研究会理事長の外山美恵子先生の登場です。  
まず、おじぎ功からはじまりました。おじぎのものが相手への礼であり、そういう日常の実践から霊性修行が始まります。霊性の修行とは実践であり、ただ気持ちが良いことだけでは、癒しになっても霊性修行とはいえないこと、ストレスをうけても、それによって力を養い、磨かれていくことが重要であることを、外山先生の「深いことを解りやすく楽しく」のお話に導かれて実感してゆきました。シンプルレッスンを一歩進め、深く充実した体験となった3時間。シンプルであっても味わい深く、心にも響く外山先生の気功への導き。確実に気功のファンが増えました!!



11/27(土) 「全力往生—自然治癒力をめぐって」

鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)

現代の医学と伝統医学や代替療法を統合、融合させる実践の第一人者である帯津良一先生をお迎えして行った気功第2回目は、題して「全力往生」。健康、長生きが第一と考える方には、不思議だと思われるタイトルかもしれませんが。しかし、いのちを燃やして、あの世に行くにもエネルギーがいる、という帯津先生は、全力で生きた人にこそ、良き往生があると説かれます。生死の問題を、文化人との広い交友からさまざまな叡智に満ちた言葉から、深く考察して行きます。悲しみと慈悲の問題、メントモリ(死を忘れないでより深く生を生きること)、そして、この日の講義の一番のヒットは「戦略的直観」というキーワードでした。日々を精進、蓄積した叡智や経験の上に、なにかを契機にして啓ける直観のことだといいます。ワークは帯津先生オリジナルの呼吸法・時空。先生とともに時空を感じ時空を超えるいのちの気功を体験できました。目に青葉、朝の気功に夜の酒。超のつく忙しきでの大人(たいじん)の風格、帯津先生の豊かな氣に触れて幸せなひとときを持ちました。



スピリチュアルデザイン—コンテクストデザインワークショップ総括 2010年度

上林 壮一郎 (デザイナー・運営委員・担当講師)

能の前シテと後シテという異世界の者が重なる中に、夢幻という芸術的地平が生まれるように、位相の違うものが響きあうとき、そこに藝術が生産するのではないだろうか。本年度は二重性という年間テーマで4回行った。1.機能と装飾あるいは機能と象徴の二重性、2.親と子あるいは仕事と遊びの二重性、3.既製品と改造品の二重性、4.あるものに別のものがのりうつという二重性である。対立あるいは飛躍断絶したものを強引に重ねていくことで生じるものは何だろうかというのが今年度の関心事であった。



「機能と装飾・機能と象徴」—かざりとほたらきの二重性 7月3日(土)

装飾は例えば渦巻き模様。象徴は例えばタオや六芒星(龍目)など。機能と装飾(象徴)は対立概念であるという見方を超えるため、融合モデルの蚊取り線香を手掛かりに、装飾と機能の同時性・二重性の状態を探究したが、なかなか難しかった。段ボールで波模様をカットしそれを並べて暖簾(格子)を作った。

「親子でつくるおもちゃ」—どうぐみたいなおもちゃ 9月4日(土)

四谷にある東京おもちゃ美術館との共催で行ったワークショップで、親子、特に父と子でおもちゃを作ることを重視した。しかしただのおもちゃではなく、道具とおもちゃの間

東京自由大学 2010年度講座報告

人類の知の遺産 (第V期) 報告

井上 喜行 (担当・理事・運営委員)

4/11(土) 「シェイクスピア」

**井村 君江** (妖精ミュージアム名誉館長)  
「われら妖精、影のもの」をテーマに、妖精、夢、影は見えないもの、それを舞台で見えるものにした、ヒトゴロシに生まれイロイロに死んだシェイクスピア、ミッドサマーは真夏でなく夏至……。



10/9(土) 「ファーブル」

**奥本 大 三郎** (埼玉大学名誉教授)  
幼児期の昆虫採集、ファーブルとの出会い、仏文学者への道、昆虫記の翻訳、生家探訪と貧乏からの生涯、ファーブル昆虫館「虫と詩人の館」の紹介などユーモアとエピソードふんだんの楽しい話。



11/20(土) 「三島由紀夫」

**井上 隆史** (白百合女子大学教授)  
三島研究のきっかけから、「金閣寺」「仮面の告白」などの創作ノートを参照して、その異様性と普遍性について具体的解説。「豊饒の海」を他者との関係性の欠如から詳説。能・班女での普遍性……。



12/11(土) 「ニーチェ」

**鶴飼 哲** (一橋大学教授)  
ニーチェにとっての正義、人間と混沌、「もっといいことは逆立ちして踊ることだ」(大駱駝艦)、人間という動物(遠近法)、契約と忘却の能力、「敵らよ、敵はいない」、誤謬の友愛論、遠人愛。



1/8(土) 「エックハルト」

**田島 照久** (早稲田大学教授)  
マイスター・エックハルトは神と私とを根本問題と捉えた。キリストをどう捉えるかを、カール・バルトとカール・ラーナーとの比較。「離脱」とは自己の中に不動にとどまること。ダンマ。



2/5(土) 「慈円」

**鎌田 東二** (京都大学こころの未来研究センター教授)  
愚管抄の関心点(鎌田正清のこと) から、中世仏教とのからみ(天河弁財天)、新古今和歌集(後鳥羽上皇)、天台座主4回(密教行者)、政治面(観念的公武合体論)、学僧慈円(勧学院再興・調伏)……。



アートシーン21 Part VIII・報告 ～クリエイティブな世界を切り開く表現者たち～

神(長谷川) その (担当・運営委員)

第1回 5/8 ガイア20年、そして「地球交響曲第七番」からのメッセージ 龍村 仁氏 (映画監督)

雲一つない五月晴れの日に龍村監督をお迎えした。最新作「地球交響曲第七番」の完成試写会の数日後ということで、監督の作品を見続けている受講者が多く、内声を聞きたい、想いを伝えたい、という熱気に包まれてのスタート。前半は作品が自主上映されて行くプロセスや軌道に乗るまでのエピソードを語られ、第1番から第6番のダイジェストに続いて第7番の予告フィルムの上映。後半は宇宙を撮る龍村監督と宇宙を語る神道家鎌田東京自由大学理事長とのトーク。天河辨財天を挟んでの深き縁を話され、熱い質疑応答に進んだ。



第3回 10/16 歌のちから Part2 あがた森魚氏 (歌手)

前半は夏合宿を同行した思い出をギターで弾き語りライブ。「山椒魚の出来た日」「るるもっぺいぶるう」「オットー・リーデンブロック博士に捧げるブルース」「赤色エレジー」をしっとり歌いあげた。後半は渋谷で毎月上映の「月刊日記映画」の映像&トーク。夏合宿後半から別行動だったが、お別れシーンの映像から、同夏、タンゴの故郷ブエノスアイレスへ渡航した時のもの。'86年8月にも出掛けタンゴの師と仰ぐプグリエーセの曲に詩を付けた名曲「街角ラ・ジュンバ」を現地で歌い、氏から抱擁とエールを送られたエピソードを披露。約20日間の滞在から生まれた4曲がニューアルバム「俺の知らない内田裕也は 俺の知ってる宇宙の夕焼け」に収録された話、自作の歌に懸ける思いを語られた。



第5回 2/19 日本画と写生～「生」を写すことのスピリチュアリティ

京都造形芸術大学芸術学部通信教育部の生徒さんも多数受講されてのご講義。内容は日本画の定義、写生という行為から何が起るのか、霊性を重視した作家たち(上村華岳・徳岡神泉・大野飯嵩)、絵を描くという事、芸術の可能性について。基本は写生、「写生」とは「生」を「写す」こと、形ではなく対象の本質を探り当て、その核と自分が一つになる理想

第2回 7/17 日本のルーツミュージック、ネイティブカルチャーとしての神楽 三上 敏視氏 (音楽家・伝承音楽研究家)

神楽研究のご著書「神楽と出会う本」の2刷りが出来あがった直後のご講義となった。日本の伝統文化への関心が高まりつつある現在、三上氏が神楽に出会われたのは97年。細野晴臣氏から「神楽をやろう」と誘われたのがキッカケとか。前半はご自身で集められた映像資料を元に作られたカラオケビデオや、主だった日本各地の神楽の映像を流しながらのトーク。ご自身が作詞作曲したオリジナル神楽曲もご披露いただいたの1時間半。後半は鎌田理事長を交えての質疑応答。親しみやすい解説で、時間は滑るように過ぎて行った。神楽のエナジーが会場を響き渡り、聴く者の心を深く揺さぶった。



第4回 12/19 阿修羅像と阿修羅展が現代社会に投げかけたもの 金子 啓明氏 (慶応義塾大学教授・興福寺国宝館館長・東京国立博物館特任研究員・日本大学客員教授)

平成遷都1300年記念の一つとして開かれた「阿修羅展」。企画遂行の総責任を任された金子氏。ハイテク時代、心の拠りどころを失い始めている現代人へのメッセージとして「日本美と阿修羅像が持つ神秘の力に触れる機会」をコンセプトに掲げた。培ってきたノウハウを元に博物館でしか見られない展示法、新たな演出を打ち出し、崇高感の中で阿修羅像と向き合い、折り、対話する空間を作り上げた。結果、造語「アシュラー」が生まれるほどの仏像ブームの火付け役に。若い世代を取り込む画期的な展開になり、一日の集客数世界一を記録する。「美の神殿」としての博物館の役割、仏像・神像にまつわる秘話を語られた。



松生 歩氏 (京都造形芸術大学教授・日本画家)

的な体験であると。愛、誠実さ、心の温かさ、哀しみなど、大事なものは目には見えないが、その気配を写しとって描き、そのときに生まれる心地よい充足感、感謝、祈りの気持ちなどについて語られた。松生先生を囲んでの神田オープンカフェは、温かな波動に包まれた空間となった。

